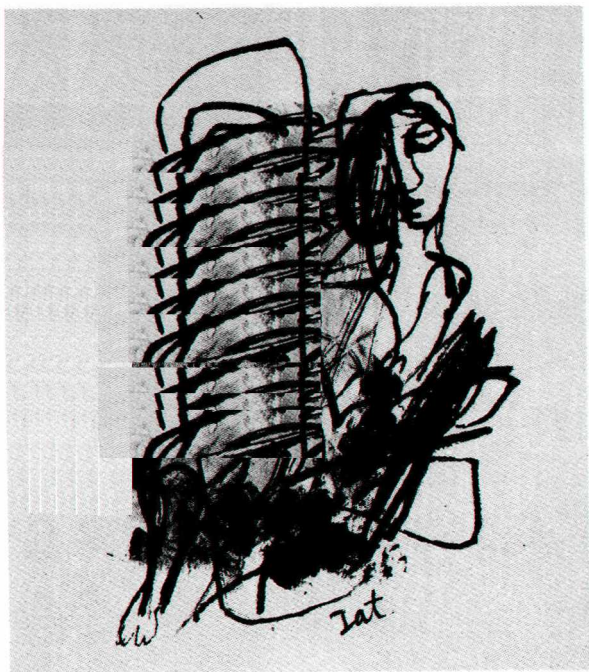




あるヴェトナム人

堀田善衛



あるヴェトナム人

堀田善衛

新潮社

あるヴェトナム人／一九七〇年八月三〇日印刷／一九七〇年九月五日発行／価六五〇円

著者堀田善衛(はったよしえ)／発行者佐藤亮一／発行所株式会社新潮社

〒一六二／東京都新宿区矢来町七一／電話(03)二六〇・一一一／振替東京八〇八

印刷所塚田印刷株式会社／製本所大進堂製本／乱丁、落丁本はお取替えいたします



© 1970, Yoshie Hotta, Printed in Japan

目次

もりかえす 5

黒い旗 27

風景異色 81

あるヴェトナム人 121

ルイス・カトウ・カトウ君 149

墓をめぐる 185

あるヴェトナム人

も
り
か
え
す

「元氣を出せ、なんていったってダメの皮なんだ。そんなこたあわかってるんだ、みんながみんな、な。元氣ってものは、なあ、深井、元氣で、過去から現在、いや、そのつい近頃の過去からつい近頃の現在にいたるまで、元氣である奴のことを言うんだ。だから、元氣である奴に向って、元氣を出せ、なんて言ったって、それやなんということでもないだろ。だからさ、な、おれは、みんながだな、みんなでだよ、もりかえせ、と言ってるんだよ。もりかえせ、ってな」

もりかえせ、もりかえせ、とくりかえしながら山口刀三はゴリラのように、あるいは重量挙げの素人が細い腕を憐れわせて重いバーベルを、胸の上からもっと上へ、肩の上へともちあげるような具合に、顔のまんなかの大きな鼻の穴を、それこそゴリラのようにふくらませて、その細い腕に満身の力をこめ、ぶるぶるふるわせながら天井に向って突き上げた。細長い馬面を真赤にして、伸ばせば異様に長い指になる筈の指を、ちから一杯、握りしめ

て両手をさし上げ、薄い胸を、恐らくは乃木大将の軍服のように、肋骨がいつぼんいつぼん張り出しているにちがいない胸も前に張り出して、山口刀三は眼を血走らせていた。

「な、なあ、深井修三、おれがな、もりかえせ、と言ってるんだ」

山口刀三のはなしのなかで、二度もその名を呼ばれた深井修三は、意外に早く酔ったらしい山口の、いつもの口癖の、な、なあ、なあ、これがひどくなると、なあよ、なあよ、と、よの字までがついて来るのだが、その、な、なあ、なあよ、がはじまったかと思つてちよつと警戒したくなつたが——もっとも警戒するといつても、いかに酔つても山口刀三は乱暴沙汰を働いたことなどはなく、第一、背丈だけは五尺八寸はあつても体重十三貫五百の山口刀三がどれだけあばれたとて、それはからだつきがずんぐりむっくりで十八貫たつぷりある深井修三にとっては、いずれたいしたことではなかつたのだが、しかしとにかく、こいつ、うるさくなつて来たのかな、と思ひ、斜め横に、あぐらをかいて膝に片腕をつき、頬をかかえこんだまま先刻から黙りこんでいる水谷参利の顔の具合をうかがおうとして眼をあげ、そこで彼は、はつとした。

はつとした、というのは、黙りこくつた水谷参利の顔になにか特別の反応があつたからではなかつた。深井修三、つまりは彼自身が、山口刀三に二度呼びかけられた、従つて山口がそのはなしを了えたときに、深井自身がなんとか返事をし、自分一個の意見を述べねばならなくなつたそのときの、その用意のために、いまの場合、たつたひとりの第三者で

ある水谷参利の顔色を、その反応を、参考にしよう、とした。そういう自分に、はっとしたのであった。

へ参考にしよう、だなんて、おれもいったい、ひどく教師根性が心の髄にまで滲み込んでしまつて、と、ひやつとする反省のようなものが来たとき、山口刀三は、

「な、なあ、なあよ、ミズタニサンリ、ミズタニミットシよ、なあよ、おれが元気を、いや元氣じゃない、もりかえせ、とこう言つとるんだな、なあよ」

と、こんどは水谷参利にはなしをもちかけて行つた、その山口刀三の血走つた眼に、歲月のもとでのかかつた愛情のようなものを認めて、もういちど、はっとした。

「な、なあ、なあよ、ミズノヤサンリ、ミットシよ、お前は中国文学者だ、母校じゃないが、とにかく厭弁じゃない、東京の大学の教授になつた。それから、深井修三は、母校にのこつて仏蘭西文学を教えとる。な、なあよ、そいでおれは、しがねえ厭弁大学の教授になつた、三人とも教授になつた、いまおれは方丈記を教えとるんだ。読めば読むほど、な、怖くなつて来るような、日本人の、本だ。な、それで、な、厭弁大学だが、東京からわずか三時間だが、だから東京から通つとるんだが、それでも厭弁は厭弁だ、な。ところでおれはな、なあよ、おれの故郷の町でそいつを教えとるんだ。な、なあよ、だからさ、もりかえせ、と言つとるんだよ、おれが、山口刀三が、な、なあよ」

「そんなにな、な、なあ、なあよ、をな、いれんでもな、お前の言うことはな、な、よく

わかつとる。わかつとるんだ」

先刻から、片手が頬に張りついたかと思える具合に、ずっと黙り込んだままだった水谷参利が、その手を伸ばして、水で割って色の甚だ薄い水ハイボールを、一口飲んでから、もういちど、

「わかつとるんだ、な」

をくりかえした。しかし水谷参利は、ひどく苦しげにわかつとるようであった。

「な、なあよ、お前が学生時代に、おれたちが、お前のやつとる文学の学問をシナ文学だの、漢文だのと言うと、お前は怒った。な。おれと深井修三に向って、自分のやつとるのはシナ文学でも漢文でもない、中国だ、と言った。そいでお前は、あの頃の、お前の主任教授がシナ文学と言うというて、憤慨しとった。それがおれたちにさえ、いくらか滑稽に思えた。それだけに、お前は、な、水谷参利はおれたちに苦しげに見えた。ロジン、あの鲁迅だよ、な、鲁迅のはなしを、おれやこの深井修三がはじめるというと、そんなときのお前の顔といったらなかった。猫背な上にな、お前は二目と見られんような歪んだ顔をしとった」

「おい、山口、な、おい、刀三よ、鲁迅のはなしはよせよ、こいつはな、水谷参利はな、いま鲁迅の論文を書いとるんだ、論文だよ」

深井修三が、山口刀三と水谷参利のはなしのあいだへわり込んだ。

「あっそうか。それゃいけねえ。いよいよ魯迅の論文か。それじゃ、おれは、黙る。日本ではじめての……」

瘦せてひよろ長い山口刀三もずんぐりむっくりの深井修三も、猫背で顔色のひどく白い水谷参利も、三人とも、もりかえせ、もりかえせ、という山口刀三の音頭にもかかわらず、そこで黙り込んでしまった。

台所から水谷の細君である、仲子が片手に大きな皿をもって出て来た。別の手には、焼酎の一升瓶、四合ほどのこった瓶をもって来た。皿には、細身のキュウリが十本ほどと、味噌のかたまりが四方に、四つかためてのせてあった。深井修三は、その味噌が、四人分、つまり山口刀三とこの家の主人である水谷参利と、それから仲子自身との四人のために、仲子が分けたのだな、と思った。とすると、仲子さんの指紋が、この四つの味噌には、それぞれついているだろう、と考えた。そして、おれはじつにへんなときにへんなことに気がつくよと考えた。

「ね、奥さん」

と、今日の喋り手である山口刀三が言った。『な、なあ、なあよ』の山口刀三が『ね、奥さん』と言ったので、深井修三も、主人である水谷参利も、くすくすっと笑った。山口刀三もそれに気がついて、これは大きな声ではあはと笑った。

がしかし、細君の仲子は、それまで子供を寝かせたり台所でござござやったりしていた

し、それに、こんなによく喋る国文学者の山口刀三にも、水谷と結婚以来、既に何回か催されたこのテーキと呼ばれる三人の会合にはなれていたが、とにかく今夜はひとりで喋っているに近い、こんな風な山口刀三には出会わしたことがなかったので、深井修三と主人の水谷参利が何をくすくすと笑い出したのか、それにつれて山口刀三が、どういうわけあいでもってあはあはと高声に笑い出したのか、それがうまく納得出来なかったのも、そこで怪訝な顔になった。仲子はきわめてはっきりした女であった。わけがわからぬながらに、その場の調子にあわせて、笑うなら笑う、悲しむなら悲しむが如くにするという、そんな精神が、なかった。

「ね、奥さん」

山口刀三がまた言った。

「奥さん、大きくなったねえ、な、なあ、深井修三」

みんながあはあはと笑い出した。仲子も、いくらかは、ね、と、な、なあよ、の——深井修三の専門の、仏蘭西語で言えば、ニュアンスというのだろう、こんなときは——差がわかったらしかった。それが、笑っているうちに、もう少し納得の行くようにわかって来たので、仲子は、自分のからだ具合が話題になっているにもかかわらず、少し声のトーンをあげて、四人のうち、いちばんしまいに笑いをおさめることになった。

「ミットシ君が」と言って、仏蘭西文学者の深井修三が、眼を一、二度くちやくちやっと

あけたりとじたりして、「どうもやっぱ言いにくいね、ミズタニサンリが、この方がやっぱいいや、奥さん、かんべんしなさいよ、ミズタニサンリ、ほんとに学生時代みたいに、ミズノヤサンリと言ったほうが言いやすいのだけどね」

「ミズノヤサンリで結構ですわ」

仲子は自分でもって来た焼酎の一升瓶をかたむけて、大きなコップの底に、コップゼンたいの五分の一ほどついで、先刻いっぱい飲んでいたので、もう真赤になっていた。それは陰惨にどす赤いと言うべき山口刀三よりも、もっと愉快な方向で、赤かった。彼女は安ウイスキーがきらいだった。

「ええ、そのミズノヤサンリが、魯迅で苦しみ出すと、あなたがふとる、のでしたね」

「そうなのよ、それで困るのよ。このひとがね、机の前にかじりついて、あの漢字ばかりのペラペラの本を前にして坐り出すと、もういけないのよ。あたしはね、もうあたし、することがないでしょう。だって、ミツトシが、ミズノヤサンリがよ、どんなにロジンで苦しんだって、あたしが助けようがないでしょう。だから、仕方がないから——だって、ロジンのときには御飯を食べてるときでも苦しげでしょう、子供だってね、ねえ、パパがへんな顔して御飯を食べてるとね、このごろは、もう小学校一年よ、そいつが、ああロジンか、またロジンだよ、なんて言うの。そんなときにね、あたしは仕方がないから、うんと御飯を食べるの。そして早く寝ちまうのよ。うんと御飯を食べて、早く寝ちまえば、ふと

るわよ」

深井修三が、なるほどこれは大きくなったわい、とあらためて見る、という風に仲子の肩から二の腕を眺めやり、

「仕方がないねえ、ふとったっていいじゃない？ 僕だって十八貫あるもの」

と、どこからか汗に似たようなものが、深井自身から出て来そうなことを言った。そして深井は、そのことばが口から、とにかく出てしまったことについて、しまった、と思った。だから、山口刀三が、

「深井はね、奥さん、こいつはひとりで苦しんでひとりで助けて、ひとりで御飯を五杯も食べているんですよ」

と言ったとき、われ知らず、思わずにゅうっと立ち上ってしまった。十八貫もあるにかかわらず、どさどさという具合ではなく、頗る身軽に、すうっと立ち上ったのだ。

お互いによくわかりあった仲だった、しかし、それだけに、なんとなく形勢不穩であった。

山口刀三自身にしてからが、しまったわい、と思っていた。なんという口惜しいことだ、おれが東京からわざわざ、三時間のところの駅弁大学の国文学教師になったからといって、母校で、とにかく母校で仏蘭西文学を、横文字のそれをやっている深井修三に向って、ひとりで苦しんで、ひとりで助けて、ひとりで御飯を五杯だなどと、よくも卑しいことを、調